

翻 訳

ヴィルヘルム・ショーフ『ベルリンにおけるグリム兄弟』—（試訳）（1）

Wilhelm Schoof, Die Brüder Grimm in Berlin, Berlin, 1964.

稲 福 日出夫

訳者まえがき：

以下に訳出を試みるのは、W. ショーフが1964年に公刊したグリム兄弟の伝記である。

W. ショーフの業績としては、先ず、彼の編集した『サヴィニー宛てのグリム兄弟の書簡集』（Briefe der Brüder Grimm an Savigny. Aus dem Savignyschen Nachlaß hrsg. in Verbindung mit Ingeborg Schnack von Wilhelm Schoof, Berlin, 1953）、また、H. グリム・G. ヒンリクスが編集したものを、W. ショーフが増補改訂した『青年時代のヤーコプとヴィルヘルム・グリムの往復書簡集』（Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm aus der Jugendzeit. hrsg. von Herman Grimm und Gustav Hinrichs. Zweite, vermehrte und verbesserte Auflage besorgt von Wilhelm Schoof, Weimar, 1963）などが挙げられるであろう。なお、ショーフが増補改訂したこの『往復書簡集』は山田好司によって全訳されている。『グリム兄弟自伝・往復書簡集』（2002年）『グリム兄弟往復書簡集』第2巻～第5巻（完）（2003～2007年）がそれで、発行は、いずれも本の風景社。

この『ベルリンにおけるグリム兄弟』は112頁の小著ながら、グリム兄弟の記録や書簡を多用しつつ、兄弟の心の動きを読者にじかに伝えようとする。その手法に魅かれてやまないものを感じるのは、ショーフがサヴィニーを中心とする歴史法学に精通しており、同時に、浩瀚な書簡集の編纂に携わったことから窺えるように、当時の人物交流を十分に把握していることによるのだろう。また、この著は、グリム兄弟の生きた時代のベルリンの政治状況にも随所で触れられており、いわば「状況のなかのグリム兄弟」が捉えられる仕組みになっている。わが国でグリム兄弟を

テーマにした書籍を読むと、この著からの引用も多々なされており、グリムに関する基本文献のひとつといえるかもしれない。その意味ではわが国でもすでに普及した本であるが、当時の状況に対する訳者の乏しい知識を補う意味で敢えて訳出を試みた。

## 『ベルリンにおけるグリム兄弟』

はじめに

ヤーコブ・グリム (Jacob Grimm) とヴィルヘルム・グリム (Wilhelm Grimm) は、それぞれ1785年と1786年にマイン河畔のハーナウで生まれ、その後、幼少時代を街道筋のシュタイナウで過ごした。というのも、1791年に、彼らの父親が、郡長・領地管理主務官 (Amtmann) としてシュタイナウで勤務することになったからである。1796年に父親が亡くなった。兄弟は、父親の早すぎる死に直面した後、カッセルでギムナジウムに通い、マールブルグ大学で法学を学んだ。ヤーコブは、大学での勉学を修了する直前の1805年1月末、パリに呼ばれた。彼の恩師であるサヴィニー (Savigny) の研究の助手を務めるためである。1806年、彼らの心の拠りどころであった故国 (Heimat) はフランス人によって占領された。その後、ヤーコブ・グリムは、まだ手のかかる弟妹たちを養うために、フランス人のもとで働かなければならなかった。というのも、彼らの母親は、1808年に亡くなってしまったからであるが、それでも、心の奥底にはドイツの心情を保ち続けたのであった。彼らの祖国がフランス軍から解放されたあと、グリム兄弟は、カッセルにある王立図書館に職を得て、彼らの人生のなかでもっとも幸福な時間をそこで過ごすことができた。しかし、職務を遂行していくなかで不条理な処遇を受けるに及んで、彼らは、ゲッティンゲン大学と図書館からの招聘に応じ、ゲッティンゲンへ去ることになった。しかし、「ゲッティンゲン七教授 (Göttinger Sieben)」の抗議に関わった廉で、1837年12月に免職処分を受け、彼らは、国外追放となった身でカッセルに戻ってきた。そこで彼らは、矜持と忍従との葛藤のなかで心が揺れながら、新たな機運が熟する

のを耐えて待ち続けた。が、ついに、1840年11月、大臣アイヒホルン (Eichhorn) から敬意に満ちた書簡が届き、彼らは、ベルリンへ招聘されることになる。

ヤーコブは、春先まで引っ越しを延ばしておくことは必ずしも適当ではないと思い、1840年12月には、住居探しのためにベルリンへ旅立った。1841年4月25日付でヴィルヘルム・グリムがダールマン (Dahlmann) に宛てて出した当時の事情を記した手紙によって、カッセルでの最後の数日間の詳しい様子を、われわれは知ることができる。「2月25日に引っ越しのための作業に取り掛かりました。諸々の用件を処理し、持っていかなければならないものを取捨選択し荷造りなどに励まなければならないことは、たいへんな心労でした。さらにまた、ヤーコブは、胸部が圧迫されて苦しいと訴えはじめ、3週間も部屋から一歩も出ることのできない事態となりました。それにまた、ドルトヘン (Dortchen) [ヴィルヘルム・グリムの妻；訳注] も具合が悪かったのですが、それが、ますますひどくなってぶり返してきました。彼女は、まる一週間ベッドに横になっていなければなりませんでした。それで、彼女の荷造りは、親切にもわれわれの面倒をみてくれた他の人の手に委ねざるをえませんでした。二人とも、ベルリンへ出発する数日前にやっと、どうにか快復することができました。これらの日々は、外面的には落ち着かず、また内面的には揺れ動いたままで過ぎていきました。私たちにとって、ヘッセンを去るなんて、非常につらいものでした。私たちは、今なお、思いやりや愛情に満ちた多くの書簡を受け取っております」。

彼らは、故郷に留まるために、マールブルグ大学およびその図書館で職を得たい、と思っていた。が、その希望も満たされることはなかった。というのも、マールブルグ大学はこの有名な兄弟二人を受け入れることに尽力したのであったが、その試みは、ハノーファー国王と親戚関係にあるヘッセン選帝侯公子の妨害にあって失敗に終わった。そこで、グリム兄弟にとって、再度 [一度目はハノーファーのゲッティンゲン大学に赴いたとき；訳注] 彼らの故郷ヘッセンを見捨て、そこを去るほか道は残されていなかった。というのも、ユリウス・ローデンベルグ (Julius Rodenberg) が記しているように、グリム兄弟の名は、たしかに何千というヘッセン人の心に残ったのではあるが、ヘッセンの国土にあってはどんな些細な居場所も彼らに残されていなかったのであった。

ヘッセン国の生んだもっとも偉大な息子たちとの別れにあたって、詩人のフランツ・ディンゲルシュテット (Franz Dingelstedt) は、民衆の気持ちを万感の思いを込めて代弁し、兄弟に対して、深い哀しみに満ちた惜別の詩を献呈した。同時にまた、その詩は、自国の偉大な息子たちを他所の国へ追いやってしまうヘッセンの国民やその君主を辛辣に非難する内容をも含んでいた。というのも、彼らは、兄弟が生み出している創造的な仕事に対し理解しようとしなかったからである。その詩のなかで、次のように詠われている。

「彼ら兄弟が新天地へ赴くのを、もはや嘆き悲しむな。  
汝がそれを望んだのであった。汝にとって彼らはあまりに偉大であった。  
大樹が萌え出るのを目にとどめおろすが、それが聳えるのを見ることはない。  
それが汝の干乾びた贖われる運命なのだ。  
かくして、彼のもっとも美しい装飾品だけが残された。  
天空、牡羊座、牛飼座、  
蟹座がまさしくそれであり、けっしてゼウスの息子たち (Dioskuren) ではない」。  
汝がそれを望んだのであった。汝にとって彼らはあまりに偉大であった。

グリム兄弟にとってカッセルという町がもっていた意味、それは計り知れないものがあつた。ヤーコプ・グリムは、外国に滞在していたときにもっとも深くそのことを感じるのであつた。ゲッティンゲンで生活していた折、彼は、その土地に馴染んで暮らしているのではなかつた。気持ちを安らかにしてくれるカッセル—その町で、彼は「あたかも緑野に芽吹いた」人生の花を咲かせたのであつた—への郷愁の念がつきまとい、異郷の地ゲッティンゲンに暮らしている彼を波立たせ、一刻も安らぎを与えることはなかつた。彼は、幾度もカッセルでの以前の生活と比較しつつ、彼のいう「極楽 (Himmelreich)」へ戻っていけることを望んだのであつた。実際、彼は、ベルリンにいるラッハマン (Lachmann) 教授に宛てた1830年7月21日付けの手紙のなかで、カッセルから去つたことはまったく「馬鹿げたこと」であつた、と心情を告白している。というのも、カッセルでは自由に振舞うことができたが、ゲッティンゲンでは、まるで「頸木をはめられた奴隷 (Knecht im Joch)」

のように感じられる、と彼は述べている。彼は、異郷にあって心中ひそかにカッセルをなつかしく思っていた。が、彼がカッセルに呼び戻される状況に至ることはなかった。彼にとって、ベルリンに移り住むという決断もそれに似たようなものであった。カッセルにおける現今の状況にあって、その招聘がどれほど名誉に満ちたものであろうとも、その決断は、けっして心軽やかになされたものではなかった。他に選択しうる余地があるというのであれば、彼は、けっしてベルリンへ行かなかったであろう。彼の気持ちからすれば、イエナやハイデルベルグ、さらには、感情的にもっとも適っているマールブルグに赴きたい、と考えていたことであろう。彼は、大都会に住むことに不安感をもち、尻ごみしていた。彼は、そこで、誰からも邪魔されず静かに研究ができるのかどうか懸念していた。そうしたなかで、彼は、1841年3月14日、さまざまに入り混じった感情を抱きながらカッセルを去り、愛おしく思う人々の墓や幾千もの美しい思い出をあとに残したのであった。

#### ベルリンにおけるグリム兄弟

グリム兄弟は、いつの日かベルリンへ移り住もうという考えを、当初からもっていたのではなかった。というのも、かつてヤーコプが述べているように、彼ら兄弟は、ヘッセン国で生きヘッセン国で死ぬ、ことを望んでいた。郷土への愛着（Heimatgefühl）は、彼らにあっては、郷土以外のどこにも幸福な土地はない、と信じるほどに強く根付いていたのである。ベルリンへ移住することになったきっかけは、かつてゲッティンゲンへの移住のきっかけがそうであったように、彼らの許へ外部からもたらされたのであった。

ヴィルヘルム・グリムは、かつて湯治のため逗留していたハレの町から、1809年に、クレメンス・ブレンターノ（Clemens Brentano）と連れだって、友人のアルニム（Arnim）を訪ねるため、ベルリンに赴いたことがあった。そこでヴィルヘルムは、そこに滞在した2か月の間、いつの日かこの町が彼の第二の故郷になることなどに思い及ぶことなく、ベルリンの土地を知り、また、そこの人々と知り合いになった。ゴータに住んでいた伯母のツィンマー（Zimmer）に宛てた手紙のなかで、ヴィルヘルムは、ベルリンの印象を伝えている。たとえば、1809年10月10日付けあ

るいは別の日付けの手紙で、彼は次のように書き記した。「ベルリンは、私がこれまで見てきたなかでもっとも美しい都市です。伯母さん、カッセルの新都心を頭に描いてください。ただし、それよりもっと大きな町で、家々も美しく豪華なもので、道路も幅を広げたものです。そうすれば、伯母さんもこの町を想像することができますでしょう。ポツダムもまた美しい町です。そこには、ただただ豪壮な宮殿だけが建ち並んでいます。…お城は大きくて壮麗です。サンスーシー城も同様です。そこにはかつてフリードリッヒ大王が住んでいたのですが。そして、これらのとてつもなく大きな建造物すべてにおいて、みずからの足音や声以外、聞こえてくるものはありません。それほど人気がなく人里離れたさびしい場所に建っているのです。…全体からみれば殺風景な土地です。ベルリンは、起伏のない広大な砂地のなかであって、ただ、片側には間伐された広大な森があります。ティアガルテンと呼ばれている森ですが、そこはなかなか美しい場所です」。しかし、ヴィルヘルムは、そこに住みたいとは思わなかった。

当時、ランズフート大学にいたサヴィニー (Savigny) に対して、1810年、新設のベルリン大学から声がかかったとき、サヴィニーがその招聘を受け入れたことをグリム兄弟は残念に思っていた。1810年以来30年の間に、多くのものごとはすっかり変わっていったにもかかわらず、この大都会にあって物おじする気持ちや、そこではつねに疎外感を覚えるであろうといった不安感が、ずっと尾を引いていたのである。

さらに、1832年 5月27日付けで、ヴィルヘルム・グリムは、ラッハマン (Lachmann) に宛てて書き送っている。実は、その手紙の10年後には、ヴィルヘルムはベルリンを終の棲家として選択したのであった。「ベルリンへやって来ることは、私を喜びと嫌悪感が綱い交ぜになった気持ちにさせます。私がたいへん愛していたアルニムの残した仕事をいつか編纂する、という考えが私を突き動かしております。そうはいっても、しかし、数週間で彼の記録類を整理することができるのか、また、けっして多くの読者をもつことのなかった彼の作品を取り纏めて刊行すること、それを私はいかにすれば完了できるのか、まったく見当がつかないのではあります。それと、ベルリンで私の友人たちに会えること、それは嬉しいことでもあります。ところで、貴殿がベッティーナ (Bettina) にかんして私に書き送っ

たこと、それは確かに真実です。私は、他のひとからも同様のことを耳にしております。彼女は、この件で私を苦しめております。が、そうはいつでもやはり、私にとって彼女は愛すべき存在です。彼女は、みずから振舞っているよりずっと善き心をもっております。彼女の精神は、神が地上にめったに送り込むことのないような、そのような美しい精神のひとつであります。また、サヴィニー夫人のまえでは私は気後れしてしまいます。私は、サヴィニーをたいへん尊敬しており、どう振る舞えばよいのか私にはわかりません。」

後になって、兄弟にとって、もはやベルリンへ赴く以外に他の道はなくなったとき、かつてヴィルヘルム・グリムが述べていたベルリンについての良くない印象や気懸りな面といったものが、正反対になってしまった。ヴィルヘルムは、ベルリンに住めば住むほど、ますますこの町が好きになっていった。というのも、ベルリンでは、カッセルやゲッティンゲンにいた頃よりもずっと快適に且つゆったりと仕事に向かうことができたからである。ヴィルヘルムは、ベルリンに住み着いて以来、他国に対してベルリンの良さを称賛し続けたのであった。

サヴィニーは、グリム兄弟と親交があり、またマールブルグ時代の恩師であった。そのサヴィニーは、兄弟がベルリンにおいて職を得ることを望んでいた。というのも、彼は、ヤーコプ・グリムのなかに世間との交渉を断ち、引き籠ってしまう性格を認めていたからである。しかし、その間に定職を見つけ図書館で勤務していた兄弟にとって、郷土を離れるということは考えられないことであった。1829年、図書館で冷遇された結果、彼らが、ゲッティンゲン大学からの名誉ある招聘に応じたときにも、彼らは、気が晴れることなく嫌々ながらそこへ赴任していったのである。というのも、彼らは、故郷を離れるとどのような心境に陥るか、ということを知っていたからである。彼らは、ゲッティンゲンの生活に我が家のように馴染むということはけっしてなく、ヘッセン国への望郷の思いにさいなまれていた。

しかし、どうにかゲッティンゲンでの生活にもそれなりに馴染んできた頃、或る深刻な人生の危機が彼らに降りかかってきた。1837年という年は、彼らの人生においてもっとも辛いもっとも不穏な年であった。ハノーファー国王エルンスト・アウグスト (Ernst August) が憲法を廃棄した。それに対し抗議したために、アルブレヒト (Albrecht)、ダールマン (Dahlmann)、エーヴァルト (Ewald)、ゲルヴィー

ヌス (Gervinus)、ヤーコブ・グリム (Jacob Grimm)、ヴィルヘルム・グリム (Wilhelm Grimm)、ウェーバー (Weber) のゲッティンゲン七教授が、1837年12月11日付けで処分され、退職年金を受け取ることなしにその職務から即刻解雇された。ダールマン、ゲルヴィーヌスそしてヤーコブ・グリムは、抗議文書を流布させたという廉で、3日以内にハノーファー国から退去せよ、との催告を受けることになる。ヤーコブ・グリムは、カッセルへ向かい、画家で銅版画師である彼の最年少の弟ルートヴィヒ・エミール・グリム (Ludwig Emil Grimm) の家に住むことになった。ヴィルヘルム・グリムのほうは、彼の家族とともに1838年10月になってカッセルに戻るようになる。

この間に交わされた書簡においては、彼ら兄弟にとって新たな滞在場所としてのどの町が考えられるか、ということが重要な問題になっていた。マールブルグ、ライプツィヒ、ハンブルグと並んで、ベルリンもまた、考慮の対象になっていた。ヤーコブの希望は、ベルリンの科学アカデミーの会員としての自己の権利を行使すること、およびベルリン大学で講義をすることであった。しかし、その希望を満たすにはさまざまな抵抗、障害があることが明らかになった。フリードリッヒ・ヴィルヘルム3世 (Friedrich Wilhelm III.) が統治している限り、ベルリンへの招聘はまったく考えられないことであった。なぜなら、王の義兄弟であるハノーファー国王エルンスト・アウグストの立場を顧慮して、フリードリッヒ・ヴィルヘルム3世が、ゲッティンゲン七教授のメンバーに関しては誰一人としてプロイセンで任用することなどありえないことであった。一方、フリードリッヒ・ヴィルヘルム皇太子 (Kronprinz Friedrich Wilhelm) は、グリム兄弟に対し大いに関心を寄せており、彼らをベルリンに迎え入れたい、と望んでいた。1840年6月7日、彼は王位に就いた。彼の即位によって、グリム兄弟にもまた、或る展望が開かれることになった。1840年は、ドイツ国の公衆の生活にとって、ひとつの転換点を意味する年であった。フリードリッヒ・ヴィルヘルム4世 (Friedrich Wilhelm IV.) の即位は、国家的高揚への期待を国民に呼び起したのであった。国王が、エルンスト・モーリッツ・アルント (Ernst Moritz Arndt) をふたたびボンの教授職に就け、リュッケルト (Rückert) をベルリンに呼び戻したこと等によって、期待に満ちた声が国民のあいだから上がってきた。国王はまた、1837年以来定職のなかったグリム兄弟



も、敬意に満ちた対応のもとベルリンに呼び寄せた。そのことによって、将来の人生設計にかんして不安定で何ら見通すことができないという兄弟の精神的重圧を取り除いたのであった。1840年11月8日、新たに任命された文部大臣アイヒホルン（Eichhorn）によって書かれた招聘状がヤーコブのもとに届いた。それは次のような言葉で締めくくられていた。「国王陛下は、貴殿と貴殿の弟の、ドイツ言語の研究や文学、歴史の領域で、長年にわたってこれまで積み上げてこられた賞賛すべき業績に対し、特別の注意を払われ、その価値を高く認めております。それ故、陛下は、貴殿ならびに貴殿の弟が現在取り組んでおられる完璧なドイツ語辞典を編纂するというきわめて困難な仕事を心おきなく推進していただくために、首都ベルリンに御出でいただき、貴殿ならびに貴殿の弟を支援したいと望んでおります」。

兄弟は、自負心と諦念のあいだでしばしば気持ちが揺れながら、カッセルでどうにか暮らしていた。ベルリンへのこの名誉ある招聘は、グリム兄弟にとって、そうしたカッセルにおける追放の身での不如意で不安定な生活から解放される、ということの意味するだけではなかった。兄弟にとって、この招聘は、ハノーファー国王エルンスト・アウグストに対してとった彼らの行動が、正当性をもっていたことをも意味するものであった。爾後大学の若者たちの教師でいることはふさわしくない、と宣告したハノーファー政府からのグリム兄弟の解任は、ベルリンへ招聘されることによって、逆に兄弟の主張の正当性が証明される結果になった。彼らの知的活動にとってベルリンは、生涯の仕事を完成させ、その最後を飾る場所であった。他のことに煩わされることなく自らの研究に没頭できる人生を送りたい、というかつてヤーコブがしばしば思い描いていた生活が、ついに実現することになった。というのも、ベルリンは、平穏な生活や快適さ、研究助成金などの点で、ゲッティンゲンやカッセルにいたときとほとんど比較にならないほどの保証をヤーコブに与えたのであった。

その日の夕方に、ヤーコブは早速、ベルリンへ兄弟を迎え入れるために尽力したベッティーナ（Bettina）に宛てて手紙を書いた。そのなかで、ヤーコブは、この招聘を受け入れる旨記し、また、大臣アイヒホルンへの返答の写しを手紙に同封した。アイヒホルンへの返書の書き出しは、次のような言葉で始まっている。「プロイセンの国境をはるかに越えて、ドイツすべての国々から希望に満ちた眼差しが向

けられている国王のお招きに、私たちは、嬉しさと感謝を込めた確信をもって従いたいと思います。私たちの人生も、もう峠を越えてしまいました。私たちは、残された日々を、愛する祖国の言語と歴史に関する研究を成し遂げること、そのことだけを目指すことに捧げたいと思っております。国王の寛容な心が、私たちに後顧の憂いなく研究に専念できる環境を創ってくださることでしょう」。

グリム兄弟に対する国王の申し出は、ベルリンへ来るのであれば大学で講義をもつことを条件に兄弟に対して合わせて2000ターラーの年棒を支払う、というものであった。ベルリン大学にはドイツ言語学やドイツ文学の講座に空きがなかった。が、ヤーコブは、科学アカデミーの会員であったので、彼は大学で講義をもつ権限をもっていた。ヴィルヘルムに対してもアカデミーの会員に指名されることによって、ヤーコブと同様に大学での講義をもつ権限が与えられる見通しであった。当初に査定された俸給は、ヤーコブとアイヒホルンとの話し合いの結果、1841年1月11日の閣令によって、兄弟に対し3000ターラーに引き上げられた。そのほかに、引越し費用として500ターラーが支払われることになった。こうした決定がなされるにあたっては、やはりベッティーナが一役買っていた。ヤーコブ・グリムは、ベッティーナ宛ての先の手紙の末尾に、兄弟ふたりに対する総額2000ターラーというのは、これまでの収入に比べてけっして多いものではないと書き記し、さらに以下のように付け加えていた。「ベルリンでの2000ターラーというのは、もちろん、ゲッティンゲンにおいて同じ条件での大凡の私の収入より少ないものです。ゲッティンゲンでは私は、講義手当は別にして、ひとりで約1200ターラー受け取っております。とはいえ、私は、年棒のことで交渉する気はありません。私は、ベルリンでは公務を課せられることはなく、また、儉約しつつ暮らしをたてると同時に、その年棒の他に近々、辞書の編纂によって収入を得ることができるものと気楽に考えております。それ故、愛するベッティーナ様、私たちが年棒について何ら要求しなかったことに関し、そう問い詰めないでください。金銭面で交渉することは、私たちにとって恩知らずで品位を落とすように思われるのです」。

しかしながらベッティーナは、ヤーコブとは異なった考え方をもっており、アレキサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt) に、グリム兄弟の年棒をもっと上げてもらえるよう相談した。アルニム家文書に保管されている手

紙の下書きには、次のように記されている。「兄弟に後顧の憂いなく学問研究に専念してもらうと、はっきりと表明された国王の意思は、ふたりに対する年棒が2000ターラーでは、全然話になりません。彼らをベルリンに招聘するという申し出に鑑みて、それではあまりに不適当であります。ドイツ文学の第一人者である兄弟のうち、弟のほうは体が弱く、しかも育ち盛りの息子や娘たち、また健気でしっかり者ではあるが、母親としての気遣いから病気がちになっていて、骨の折れる家事を切り盛りすることに長時間は耐えることができない妻のいる家族の扶養 [原文ではこの箇所欠けたところがある一原注]。提示された条件では、彼ら兄弟が長い間愛情を込めて育ててきた目標に没頭できる時間をどうやってつくりだせるでしょうか。

兄弟ふたりは、これまでライプツィヒ協会からの寄付金だけで生活しており、また、彼らの義妹の家で暮らしておりましたので家賃はいりませんでした。彼らは同郷の人々の好意でなんとかやってきておりましたが、それでもかなり生活を切り詰めなければならませんでした。医者とは彼らから一銭もとらずに診てくれましたし、学校の教師たちも、彼らの子供たちを学費免除で教えることを名誉に思っておりました。彼らから儲けようと思う店主などひとりもいませんでした。そうした友人たちによる積極的な支えが、今や無くなってしまうのです。ヤーコプは経済的に窮境にあって、物価の安いカッセルにおいてさえ、礼服用の黒い外套を作ってもらうのにひどく困っております。そうでなければ、彼は、国王に感謝の念を述べるために、すでにここに来ているでしょうに。

グリム一家が市街地からまったく離れた区域に住むのでないかぎり、ここベルリンでは、住居費用として400ないし500ターラーは必要となるでしょう。彼らは多くの部屋を占めてしまう蔵書を抱えております。この一家には、少なくとも女性二名のお手伝いさんを雇う必要があります。そのための費用として、最小限250ターラーはかかってしまうでしょう。ここでは、年に7か月間は暖房しますので、その燃料費として200ターラーは下らないでしょう。兄弟それぞれの衣服代として、少なくとも100ターラーは必要でしょうし、また、すでにかなり大きくなった二人の息子もおります。ヴィルヘルムは病気がちであり、昼食に一杯のワインと、簡素ながらも滋養のある食事を必要としております。——私は、日常生活を送るうえで必要

な費用の半分も述べておりませんが、すでにこれだけでもかなりの額になっております。提示された年俸では生活するうえで困難であるということを、フンボルト様、貴殿から報告してください。

また、次のことに関しても、私は口をつぐんでおきます。この兄弟は、多くの研究者仲間と親しく交流しており、彼らは方々からグリム兄弟の家を訪れます。そして、彼ら訪問客はいつも兄弟宅で泊っていきます。が、今や来客用の部屋の確保を諦めざるをえなくなるのです。兄弟の置かれている状況がこれ以上圧迫されることがないならば、これらに関して愚痴をこぼすことは、なるほど感傷に走りすぎるかもしれません。が、提示された年俸には、明文をもって、ヤーコブにはアカデミーの会員として講義する資格があるので、大学で講義をもつことを条件にしております。しかし、彼は、他の教授たちのように工場へ担いでいく手慣れた袋を持ち合わせてなく（大学で講義することに未だ慣れてない、の意か——訳注）、講義には準備のための勉強が必要になります。そうした条件のもとでは、グリム兄弟に対してここベルリンで何ものにも煩わされることなく自由に研究に専念してほしい、という国王の高貴な意思、つまりドイツ全土に響き渡った喜ばしい呼びかけは、その実が満たされなくなります。

1840年11月21日に早くも、フンボルトは、ベッティーナの意見に賛同する旨返答し、フンボルトが、文部大臣アイヒホルンと会い、兄弟の年俸を3000ターラーに上げるよう持ちかけたこと、それに対してアイヒホルンも3000ターラーの年俸を確約したことを書き添えた。フンボルトは、彼の詳細な叙述を次の言葉で締めくくった。「或る目標をたてるのであれば、その方策も考えなければなりません。どのような手立てがなされるかに万人の目が注がれており、それは国の名誉に関わっております」。

こうした事の経緯によってグリム兄弟は、長年の金銭の苦勞からすっかり解放された。その感謝に満ちた胸の内を、ヤーコブ・グリムは、2月10日、ダールマンに書き送っている。「私たちの置かれた外的な事態は、そのおかげで、ついに好転するすることになりました」。カッセルではヤーコブが僅かに600ターラー、ヴィルヘルムが当初は100ターラー、後に300ターラー、ゲッティンゲンではヤーコブが副収入を除いて1000ターラー、ヴィルヘルムが500ターラーの収入であったことを考慮

に入れるなら、提示された年俵は、当時であってはかなり高額であった。さて、兄弟は、後顧の憂いなくベルリンでの生活を始めることができた。

ヤーコプは、ひどい風邪に罹って病み上がりの身であったにもかかわらず、1840年12月8日、ベルリンに到着した。自身と弟家族のための借家を探すためであった。彼は、ベルリンに住んでいる友人宅の傍らで心のこもったもてなしを受け、モイゼバッハ (von Meusebach) 宅に滞在した。ヤーコプは、ベルリン到来にあたって或る小さな冒険を体験した。そのことを彼は、1840年12月8日、カッセルにいる弟ヴィルヘルムに報告している。「私は、今朝4時45分に無事ベルリンに到着しました。道中は、晴れ渡っていて温暖な天候に恵まれ、明け方に寒くなったぐらいのものでした。ただ、最初の晩には腰のあたりが少々痛みましたが、それも二日目には感じなくなりました。私は、疲れきっていて睡眠を必要としていたので、私の習慣に反して、荷車のなかで少し眠ってしまいました。ここベルリンに到着すると、思わぬことが起こってしまいました。つまり、私は、郵便局で馬車を雇い、直ちにカール通り36番地のモイゼバッハ宅に向かいました。カール通りにはたやすく着いたのですが、その地番を見つけ出すのは容易ではありませんでした。というのも月明かりのおかげで、それだけ一層影の部分が濃くなって家の番号表示が識別できなかったのです。よたよたと歩き回ったり夜警に尋ねたりした後、その家をやっと探し当てました。私は旅行鞆を床に置き、勇気を振り絞って呼び鈴のひもを引っ張りました。が、誰も姿を現さず、灯りがともった様子もありませんでした。それで、なお半時間ほど鳴らしていました。とうとう階下の見知らぬひとが起きてきて、戸を開けてくれました。彼は、モイゼバッハはこの建物に住んでおられるか、という私の質問に対して、そうだ、と答えました。私は、3階に上がっていきましたが、やはりドアは閉ざされており新たに呼び鈴を鳴らしました。しかし深い眠りに包まれているか、あるいは聞こうとしないように感じました。それで私は、6時頃まで階段のうえで座り込んでいました。とうとう2階の部屋に灯りがともったので近づいていきました。そこの見知らぬ男は戸を開け、モイゼバッハ夫人は家におられるだろうが奉公人をおかずひとりで休まれている、家政婦は朝にならないとやって来ない、と教えてくれました。そのあいだに彼は、親切にも身体を休めるようにと私を部屋に招き入れ、コーヒーを沸かし新聞をもってきて、8時頃まで泊めてくれ

ました。モイゼバッハ夫人が目覚めると、慌ただしく事態が転回していきました。夫人は、呼び鈴が鳴るのを聞いてなかったのです。私は、今度はモイゼバッハ宅に温かく迎え入れられました。あらかじめ準備されていた部屋に案内され、そこで私は、8時から11時までさらに寝入ってしまいました。それからやっと起きだして、すぐにあなたがたに私が無事到着したことを伝えるペンをとったのです。モイゼバッハ氏には、私が来たことの知らせが直ちにいつておりますので、おそらく昼過ぎにはやってくることでしょう。ベッティーナとは2時に昼食を一緒にとることになっております。今後どういうことになるのやら私にはわかりません。が、あなたがたは何も気遣うことはありません。どうぞ御自愛ください。私は、いつもあなたがたの傍にいたいと思っております。何千回も挨拶を送ります。ヤーコブ。

ヤーコブはベルリンに着いたその日のうちに、そこで住民登録をしている。「外国人登録。1840年12月8日。ヤーコブ・グリム。宮中顧問官・教授。カッセルより転入。カール通り36番地、K. H. G. モイゼバッハ方に滞在」。

12月11日に書いた二度目の手紙のなかで、ヤーコブは、あっちこっち引っ張り出されたり訪問を受けたり、また終わることのないおしゃべりに明け暮れて息つく暇もないと伝えている。ヤーコブ・グリムは、数日後にはベルリンを離れたいと望んでいた。が、この点で彼は当てが外れたのであった。彼は、みずからの意思に反して、クリスマスまでベルリンに滞在することになった。主としてモイゼバッハ夫人とベッティーナが彼の面倒をみており、ヤーコブは彼女たちと一緒に冬の厳しい寒さのなか、住居探しに出歩いていたのであった。ヤーコブは12月20日、手紙でこう記している。「私は先週、ベッティーナとモイゼバッハ夫人と一緒に厳しい寒さのなか、住居探しにあちこち駆けずり回っておりました。実にさまざまな区域に建っている住居を、おそらく20軒以上見て回ったことと思います。それぞれの物件について、各人がさまざまな意見や印象を述べあいました。が、昨日、やっと感じがよくて快適な家を見つけ、決めることができました。その家は、あなたがたにも気に入ってもらえ、多くの点で満足のいくものだと思います。2年間 (1841年の復活祭の日から1843年まで。そうするほかなかったのです) 借りることにしました。その家は、ティアガルテンの傍のレネ通りにあります。家賃は、460ターラー、もっと正確には475ターラーです…。私たち家族にとって適当な物件は、どんなに安くても

380ターラー以下の家賃では手に入れることはできず、380から500ターラーかかってしまいます。その家は、9ないし10の部屋があり、またバルコニーもついております。或る構想を練っております。立地条件も立派だと思います。家主は建築家のヒツィヒ（Hitzig）氏で、有名な法律家の息子です。すべての面で真新しく清潔で、1年前に建てられたばかりの住宅です……。私たちは、まるで（カッセルと同様）緑野にいるかのように、ここで静かにのびのびと、穏やかに住むことができ、環境の変化をそれほど感じなくてすむことでしょう。生活を維持するうえで必要なものは大部分近くで用をたすことができ、ちゃんと運び込まれるでしょう。

クリスマスの晩に、ヤーコブ・グリムは、やっとベルリンを去ることができた。転出届けにはこう記されている。「転出届け。宮中顧問官・教授ヤーコブ・グリムは、1840年12月25日夕方、ここから自宅へ帰路についた。K. H. G. von モイゼバッハ」。

さらにヤーコブ・グリムは、国王に拝謁したあと、クリスマスの最初の日にベルリンを後にし、ハレやイエナを経由して、12月末、ひどい風邪をひいたなか再びカッセルに戻ってきた。カッセルで彼は、家族に多くのことを語らずにはおれなかった。

1841年3月14日に、グリム一家はカッセルを離れたのだが、3月19日になってやっとベルリンに辿り着いた。というのも、家具類をいっぱい詰め込んだ運搬車、氾濫したザーレ川と窪地を避けるために大きく迂回せざるをえなかったからである。ベルリンに着いても、グリム一家は、ティアガルテン近くの彼らの快適な住宅に入居できるようになるまで、なお6日間は宿泊所に住まわざるをえなかった。グリム兄弟は、当初は大都会の騒音を懸念していたが、通常ひとが慣れるよりもはやくベルリンでの生活に住み慣れたのであった。1841年4月6日、ヴィルヘルムは、カッセルにいる弟ルートヴィヒ・エミール・グリム（Ludwig Emil Grimm）に最初の手紙を書いた。「私は、今、私の書斎に戻ってきて座しています。この部屋は、カッセルにいたときとほとんど同じように配列してあります。ただ、絵画だけはまだ掛けてありませんが。窓の外に目を向けると、右側のほうにはティアガルテンの景色がみえます。それは実にすばらしいものです。左側は、庭のほうに向っており、トルコ風の優美なバルコニーを備えた新築の家がみえます。ヤーコブも書斎の整理を大方終えておりますが、ドルトヒエン（ヴィルヘルムの妻）の部屋は依然

として雑然としたままです。彼女は子供部屋で寝起きしています」。

ヴィルヘルムは、ゲッティンゲン時代の古い友人であるフーゴー (Hugo) 教授に宛てて、1841年4月25日、詳細な報告をおこなっているが、そのなかに次のような記述がみられる。「コルネリウス (Cornelius) が私たちの近所に住んでおります。この地区一帯は、ほとんど学者だけが住んでいるので、カルチェ・ラタンと呼ばれています。通りはティアガルテンの端まで伸びています。ティアガルテンは、今まさに木々の新芽が一斉に吹き出していて明るい景観を作り出しております。それに加えて、そこは、町の中心部のざわざわした空気とは異なり、田舎風の静寂さにおおわれております。私たちはこの場所をたいへん気に入っており、そこで故郷カッセルのベレヴュー通り (die Casseler Bellevue) を思い起こし、その役目を果たしてくれます。それだけでなく子供たちにとっても、ティアガルテンは格好の遊び場所です。わざわざ子供の手を引いて遊び場を求めて歩く必要はありません」。

ヴィルヘルムは、ゲッティンゲン七教授事件で共に戦ったかつての同僚ダールマンにも、1841年5月27日、次のように伝えている。「私たちは、2年ほど前にやっと建設された道路に面した家に住んでおります。その通りは、ティアガルテンの端に繋がっていて、田舎の別荘のような趣があります。通りの片方は庭園に、もう片方はオークの木々に囲まれています。それはヘッセンほどには美しくもなく素晴らしいわけでもありませんが、それでも堂々たるものです。砂質土では本来うまくいかないものが、管理に細心の注意を払うことによって埋め合わされております。そうした慎重な気配りによって、ティアガルテン全体が維持され、育成され、飾られているのです。実際、私が、騒々しくて暑い町中を避けて散歩することができることもまた、かけがえのないことなのです。私たちの住居は、ゲッティンゲンにいたときほど広々としているわけではありませんが、それでも感じがよくて、家全体が整えられ、センスに満ち溢れております。講義室への行き来には、たっぷり1時間がかかってしまいます」。

ヤーコブ・グリムも、1841年4月25日、友人のダールマンに報告していた。「私たちは、ティアガルテンの端に接する、町はずれのレネ通り (8番地) に住んでおります。ティアガルテンは管理が行き届いており、草花が咲き誇り、金魚も泳いでいて、それらが気持ちよく配置されており、明るい印象を与えてくれます。ちょうど



今は、いっせいに新緑が芽吹いている季節です。しかもここでは、少なくともたいのい日々は、心地よい田舎風の静寂さに包まれております。一方、町の中心部においては、馬車が走りまわり絶え間なく続く騒音に心が掻き乱され、一直線の道路は、その道の末端を見通すことができず、私にとって歩き始めた瞬間から疲れを感じさせます」。

ティアガルテンをグリム兄弟は毎日散歩した。その公園は、兄弟にとって、彼らがカッセルのベレヴュー通りに住んでいた頃の緑野を思い起こさせ、その代用の役目を果たしてくれた。仮にティアガルテンがなく、そこが田舎風の静けさに包まれていなければ、兄弟が、あれほど容易にベルリンでの生活に住み慣れるということではなかったであろう。ティアガルテンは兄弟の生活 (Sein) の中核であった。1859年12月に亡くなった弟ヴィルヘルムの追悼講演——それは、翌年7月に科学アカデミーで催された——で語ったヤーコブの次の一節は、私たちの悲しみを誘うが、同時に感動をも呼び起こす。「ティアガルテンで弟が思いがけず別方向から現れて、彼と不意に出くわすことが、私にとって、どれほど嬉しかったことだろうか。そして、私たちは、お互いに黙ったままうなずいて、すれ違い、通り過ぎていくのであった。もはや、こうした場面は決して起こらないのだ」。ヤーコブ・グリムは、ベルトホルト (Berthold) が1863年7月2日の散歩の折に彼と語り合ったところによれば、ティアガルテンのなかでもっとも人目に付かず心休まる場所を知っていた。そこはガチャガチャ鳴り響く馬車の音を聞いたり感じたりすることのないところで、散策しているひともめったにやって来ることのない場所であった。ヤーコブは、背筋を伸ばした姿勢を保ち、幾分か頭を前にかがめて散策した。彼はステッキを用いることはなく、また、歩く際には左手をつねに背中に据えるのであった。彼は、周辺のどんな些細なことにも注意を向けた。とりわけ、彼は、フランスに由来する外来語の使用に対し、それは思慮を欠いた猿真似だと批判し、官庁が用いる外来の名称・表示を毛嫌いしていた。それに関して、1846年12月の或る「投書」がひとつの証しとなる。その投書は、グリム兄弟の遺品の中から見つかったものである。

「ティアガルテンのなかの新しい水路に沿って据えられた立て札に、外来語が用いられた訳の解らない警告が記されている。『誰も土手や歩道へ立ち入るべきではない (Niemand solle die Dossierung und Banquette)』。果たしてこの警告の意

味を、人々がじゅうぶんに理解してくれるかどうか。そこの建設土木の管理者たちは、育成中の芝生内への立ち入り禁止という立て札を据えるためのちゃんとしたドイツ語を知らないのだろうか。実に多くのことが嘆かわしくなる。それはなにもドイツ語の乱れに限ったことではない」。

1846年4月の初め、グリム兄弟は、レネ通り8番地の狭くなってきたこれまでの住まいから、ドロテーン通り47番地の住居に引っ越した。この新しい住まいは、ブランデンブルグ門からそう遠くない場所にあった。「私たちは、これまでとは異なったティアガルテンの区域を眺めております。両側への日当たりがよく、風通しもよい場所です」。ヴィルヘルム・グリムは、嬉しさのあまり、ボンにいたダールマンに宛てて手紙を書き送った。しかし、1年後には彼らは、契約期間はまだ2年残っていたにもかかわらず、そこを引き払わざるをえなかった。というのも、家主との事務的なことがらを任されていたヴィルヘルムが、ゲルマニステン大会へ参加するためフランクフルトに滞在していたこともあって、つい家賃を期限内に送金することを怠ってしまった。この契約違反のために、家主が、グリム兄弟に対して家を出てほしいと予告してきたのであった。

この住宅は、ティアガルテンからブランデンブルグ門を通るとすぐ左手に30歩ほど上ったところにあった。この家は角地に建っていたので、片側はドロテーン通りに面しており、他の側からはティアガルテンを眺めることができた。ヴィルヘルム・グリムが1846年10月25日、アルンスヴァルト夫人 (Frau von Arnswaldt) に書き送ったように、兄弟が、これほど心地よく、また立地条件に恵まれた住宅をふたたび見つけ出すことはなかなか容易なことではなかったであろう。

夫のヴィルヘルムとは反対に、ドルトヒェン・グリムは、彼らが引っ越さなければならなかったことを悲しんではいなかった。彼女は、ベッティーナに宛てて書いている。「私たちが今度引っ越すことを、私はもちろん喜んでおります。ここでのヤーコブの部屋は、あまりに寒すぎるので、毎日3回暖房しなければならず、どうしようもありません。彼は、あまりに寒いので、つねに私の古いスカーフを膝に巻きつけて縛っております。グストヒェン (Gustchen, ヴィルヘルムの末娘アウグステの愛称。ヤーコブは彼女をそう呼んでいた。小さなアウグステの意——訳注) が、ヤーコブの姪ですが、役立ってほしいとの思いでヤーコブの誕生日にむけて、

彼に毛糸の膝掛けを編んでおります」。

グリム兄弟は、それから彼らの生涯を終えるまで、ポツダム広場からそう遠くないリンク通り7番地の家の2階に住むことになった。その家には、今日、ベルリン市が記念銘板をはめ込んでいる。1階には、古典語学者で原典考証学者のアウグスト・エマヌエル・ベッカー (August Emmanuel Bekker, 1785-1871) が住んでいた。ドルトヒエン・グリムがベッティーナに書き送ったように、この新しい住まいは、そう美しくはなく部屋数もそう多くはなかった。が、「男性陣にとって、この新しい家のほうがはるかに良くて、とくにヤーコブにとってそうであります」。兄弟は、レネ通りの田舎風の静寂さに包まれていたときとは異なり、今や大都會の雑踏にかなり接近して生活することになった。というのも、彼らの住宅の裏手には、ポツダム駅がそう離れてない場所にあったのである。

ヴィルヘルム・グリムは、カッセルにいる弟ルートヴィヒに次のように伝えている。「このリンク通りは、まったく新しい街並みです。君がここに居た頃はまだ建設されてなかったでしょうが、今やすでにかなりの数の立派な家々が建ち並んでいます。今度の住居はすばらしいのですが、私は、550ターラーの家賃を支払わなければなりません」。1857年2月14日、グリム兄弟がリンク通りに住み始めてすでに10年が過ぎた頃、ヴィルヘルムは、ベルリンの町が西側に拡張していくさまをルートヴィヒに報告している。「私たちの住まいの近辺は、絶えず建築ラッシュに沸いております。君がまだ見たことのない新しい運河が、しかもそれには小さな港湾も設けられているのですが、その運河が、一軒また一軒と手前のほうに伸びてきております。今や、ひとつの新しい町が現出しております。シェリング通りやアイヒホルン通りにもそのうちに、大きな美しい建物が密集し、建物の壁がまだ乾ききらないうちに、人々が越してくるでしょう。そこでまた、家賃もますます高くなっていくものと思います」。

#### ヤーコブとヴィルヘルム・グリム、就任講義を行う

1841年4月30日、ヤーコブは、ベルリン大学において彼の就任講義を行った。5月11日にはヴィルヘルムもこれに続いた。驚くべきことに、ベルリンで発刊されて

いる三つの新聞、すなわち、フォス新聞、シュベナー新聞、シュターツ新聞はどれも、この出来事には一言も触れていない。ただ、アウグスブルガー・アルゲマイネ新聞だけが、5月8日に、この件にかんして次のように伝えている。「ベルリン、4月30日。本日、ヤーコプ・グリムは、100名を超える聴講者を前に当地の大学で、ドイツ法古事学にかんする彼のベルリンでの講義を開始した。長々と続いて止まない祝福の嵐に迎えられて、彼は、明らかに感動しながら礼を述べた。その感動は、なおしばらくのあいだ彼を包みこんで、彼の講義全体に或る程よい熱情を放っていた。『運命は私を屈服させず、むしろ高めたのである。私が運命というものを、それだけ逆にいっそう褒め称えるのは、まさにその運命が、諸君のなかへと私を導いてくれたからである』と、ヤーコプは述べた。それから彼は、みずからの学問方法の特徴が、考察方法ではなくて事物そのものに重きを置き、思考を素材から湧きださせる手法にあることを示し、また、ドイツが外国の支配下におかれ、屈辱に満ちた重苦しい灰色の日々にあって、彼は、祖国の古代に慰めを求め、また、文法の研究と並んで、特に詩と法 (Poesie und Recht) に目を向けたのである、と語った」。

ゲオルグ・クルティウス (Georg Curtius) も、彼の伝記のなかで、ヤーコプ・グリムにかんして記している。「ヤーコプ・グリムが講義を開始した日は、ベルリンの学問世界にとって重要な記念すべき日であった。彼は、そのような大勢の聴衆を前にして話すということに不慣れであった。絶えず激しく脈打っている胸の鼓動が、彼の思索の流れを妨げた。しばらく話をしては、また、長い沈黙が続いた。しかし、そういったことをまったく意に介せず、静かに考え込みながら、ヤーコプは、窓の外のマロニエに目をやった。そして、彼がふたたび言葉を見出すまで、100名前後の聴衆のあいだを物音ひとつしない静寂さが支配していた」。

ヴィルヘルム・グリムも数百人の学生たちの生き生きとした祝福の声で迎えられた。ヴィルヘルムは、彼のこれまでの運命に対する諸々の思いやりに感謝し、次のように言い添えた。草花というものは夜に生育するものであり、花を守りその衣をなす萼はその間しっかりと閉ざされ、来るべき朝になるとそれだけ一層美しく咲き誇る、と言われている。その例えを、彼は、みずからの生き方にも当てはめて、私がもう少し若ければ、と述べる。が、彼は、みずからに襲いかかった夜の寒気が彼を傷めることは決してなかったと断言できる、と語るのであった。ヴィルヘルムは

聴衆の許しを請うた。というのも、彼は、聴衆をまっすぐに舗装された大道へと、つまり、目標だけを見定め、そののみに向かって突き進み、脇道に入り込む視点を抑止するようなポプラ並木道へと聴衆を連れ出すつもりはないこと。逆に、彼の辿る道のりは、自由な野原へと、そこでは生のままの自然と、祖国の良きいにしへの姿を示すことのできる観点を見出し、それを概観できる野原へと聴衆を連れて行く、というのである。そうした前提にたって、ヴィルヘルムは、グードルーン (Gudrun) 伝説の歴史とそれのニーベルンゲンとの関係について明快な概観を与える講義をおこなった。

ヤーコブは1848年まで、ヴィルヘルムは1852年までしか講義を行わなかった。ヤーコブは、「法古事学」「神話学」「ドイツ語文法」「タキトゥスのゲルマーニア」を、ヴィルヘルムは、「中高ドイツ語詩」について講義した。彼ら兄弟における教授の天賦 (Lehrgabe) は、同じではなかった。トライチュケ (Treitschke) は次のように述べている、「ヤーコブは人並み優れた研究者ではあったが、人並み劣った教師であった。彼は元来、まったく教師の柄ではなかった。彼はまったく落ち着きのないひとで、彼の講義についていくことなど不可能であった。それに対して、ヴィルヘルムは、卓越した教師であった」。

### 三月前期のベルリンにおける社交的な生活

グリム兄弟は、大都会の「騒々しい」活況にみちた生活に過度の期待を抱いていたわけではなかったにもかかわらず、また、社交上の義務が増えることによって彼らの仕事をかなり侵害されてしまったにもかかわらず、彼ら兄弟は、そうした事柄とは根本的に無縁であったゲッティンゲンでの生活よりもむしろすばやくベルリンでの生活に馴染んでいった。ゲッティンゲンでは彼らは、故郷ヘッセンへの郷愁の念に強く揺り動かされて生活していたのである。ベルリンで兄弟は、交流仲間のなかで大いに人望を集めていた。なるほど、ゲッティンゲンの人々と同様、ベルリンの人々も友好的な人間関係を築いているが、おそらく親密さの点では、ゲッティンゲンのほうが優っていただろう。が、その反面、ベルリンでの人間付き合いは、一層活気にあふれ、洗練されていた。50年代になってやっとヴィルヘルムは——ヤー

コブはそれよりもっと早くに——、社交的な生活から身を引き、書齋にこもって学問に専念する生活を送ることができた。

国王の例にならって、宮廷の官吏たちは、学者や芸術家たちとも交流していた。そうした新たな交流を築くなかで、グリム兄弟は、故郷を遠く離れてしまったことへの痛みをほとんど忘れかけていた。兄弟の遺品のなかに40年代のヴィルヘルムの日記帳があるが、それには、招待されたパーティーのことを記したメモ書きがびっしり書き込まれている。そこから無作為にいくつかの箇所を取り出してみよう。1847年5月4日、晩、サヴィニー宅での集まりで、国王がヤーコブのもとに歩み寄ってきた。国王は彼に手をさしのべ、次のように述べた。「私は、貴殿に長い間お目にかかってないので、貴殿がどのようにお過ごしなのか、知る由もないのです」。国王は、私にも問いかけてきた。ヤーコブは、ヴィルヘルムもここにいます、と述べ、そこで彼はグラスを手にとってこちらを見た。1847年5月17日、きょうはアルブレヒト公 (Albrecht) のもとで宴会があった。黒の襟飾りで参加してよいとの案内があり、平服の人々も出席していた。1847年5月27日、ラジウィル侯 (Radziwill) のもとで華やかな晩餐会があった。プロイセンの皇太子と皇女、サーガン侯爵夫人 (Sagan)、サヴィニー夫人、ロシア公使などもそこに出席していた。しばらく後、プロイセン皇女が、私のところにやって来て、丁寧に声をかけてくれ、ダールマンのことなどを話しはじめた。

1842年5月31日、プール・ル・メリット勲章の平和部門が設立されると、その受章者にヤーコブ・グリムも選ばれた。ヴィルヘルム・グリムは、そのとき、カッセルにいる弟のルートヴィヒに書き送っている。「ヤーコブは、この新たに設けられた勲章にびっくりしています。管轄する省庁以外の誰も、それが設立されたことについてなにも知りませんでした。ヤーコブは5月31日より数日前にサンスーシー城の晩餐に招待され、そして当日の31日の朝、受章しました。プール・ル・メリット勲章の受章者は、ドイツ全土でも30人しかおりません。また、この平和部門では唯一の受章者でしたので、彼の受勲はひときわ目立っておりました。そこで彼は、辞退したものかどうか、受勲する資格があるかどうか、かなり悩んでおりました。豪奢に催された受章式や祝宴の数日後に、私は、もう一度、宮殿へ食事に招かれました。そこには、約40名の人々しか居合わせておらず、たとえば、以下に記すよう

にきわめて著名な方々ばかりでした。サヴィニー、コルネーリウス (Cornelius)、シェリング (Schelling)、緑の眼鏡をかけた半盲の老いたシャドー (Shadow)、フォン・マイヤビーア (Meyerbeer) などが招かれておりました。ヤーコブは、宮廷の侍従長の手違いで、招かれておりませんでした。国王は、すぐさま私にヤーコブのことを尋ねられたので、私は、兄は案内を受け取っていない、と答えました。すると国王は、『ヤーコブは、たとえ案内状が届かなかったとしても来るべきだった』と返答されました。そのために、国王は彼を科学アカデミーの公式のメンバーに招聘したのであった、と述べ、ヤーコブに会えなかったことを残念に思う、と告げました。それからしばらくして、ヤーコブは、スウェーデン人のリント (Lind) が歌った折り、晩さん会も兼ねた宮廷演奏会に特別に招かれました」。

ほかにもまだ、諸々の招待に欠けることはなかった。1843年1月3日付けの或る手紙のなかで、ヴィルヘルム・グリムはダールマンに宛てて、シャルロッテンブルク宮での宮廷晩餐会について報告している。「国王は、私に対して『貴殿は病氣療養ののち、お瘡せになられましたね。しかし私はお瘡せになった貴殿を羨ましく思います。』と声をかけてくれました。実際、国王は以前より太っているように思われました。国王は晩餐会のあいだ上機嫌で、彼流の冗談をとばしておりました。国王は、私たち二人としばらくの間、話をされましたが、私にとって、再度、国王の知的で魅力的な人柄や親切な性格を感じることとなりました。私はまた、王妃にも引き合わせてもらい紹介していただきました。王妃は、ゲッティンゲンでの知人がいなくて、ここで私がさびしい思いをしてないかどうか、と尋ねられました。王妃はゲッティンゲンの人々を知っており、またたいへん気に入っておりました。——それだけでなく、カッセルのことも尋ねられたので、私は、ベルリンがカッセルの役目を果たしてくれるとはもとより思っておりませんが、しかし、私の住んでいるティアガルテンはやはり実にすばらしい、と答えました。王妃は、さらに、ヘッセンのことを話題にされ、亡くなった選帝侯妃の人柄をほめたたえました。そして、『今では、そこはもはや良きところではない』と述べられました。王妃は、きわめて明快に自然体で話をされ、その眼の表情や話し方全体のなかに、何かたいへん善良なるもの温和なるものをもっておられます」。

宮廷で催される饗宴への数多くの招待とならんで、宮廷以外の他の催しに招かれ

る機会にも欠くことはなかった。1843年12月17日に、ヴィルヘルム・グリムは弟のルートヴィッヒに書き送っている。「一昨日、学生たちが教授たちのために、或る催しを企画してくれました。コンサートでは、学生だけで歌い演奏してくれました。そのなかの二三人は美しい声をもっておりました。彼らの提示するものは何ひとつとして、つまらないと思われるものはありませんでした。企画した学生たちが、みずから馬車でやって来て、直接、教授に招待を申し出るものだから、誰一人としてそれを断ることはできませんでした。また、そのような一致協力した計画は、はじめての試みであったので、皆も喜んで参加しておりました。それでも、家族とうまくいっている教授だけが選ばれて招待されていました。おそらく全体では400名に達していた、と思われます。その催しの主要部分は新たに華やかに組み直されて、パーティー全体とうまくかみ合っておりまして。食事の際には韻をふんだ乾杯の辞が述べられ、学生たちは代わる代わる或る廊下で歌い、オーケストラは別の廊下で演奏しておりました。その催しは、すべてにおいて実に素晴らしく立派なものでした。私は、食事が済んだのち、12時に家に帰りましたが、舞踏会はもちろん深夜遅くまで続いておりました。ヤーコブは、私より早くに帰宅しました—。

続く昨日はまた、(1830年から文部省の枢密参事官に就いている) コルトウム (Kortum) の自宅で、コルトウム宅を訪れていたコルトウム夫人の兄弟を表敬するための華やかな午餐会がありました。3時から4時まで講義が入っていたので、私は、2時半に大学に出かけ、それから、銀貨5個で二三百ターラー当たることができるが、おそらくほとんど空くじだけが発行されていると思われる報奨金付きつじ馬車を利用して午餐会に参加しました。そこでは、海魚や雉の肉、シャンパン、アイスクリームといったものが出されました。8時頃になってやっと私は、家に戻ることができました。なかなか気が乗らなかったのではありますが、私はふたたび仕事に取り掛からなければなりません—。先日はまた、ボーレン (Bohlen) 伯爵夫人のところでパーティーが催されました。(ボーレン伯爵夫人は以前にカッセルで暮らしたことがあり、グリム兄弟とは親しい仲であった)。そこにはドルトヒェンも誘いを断ることはありませんでした。それは、少人数のささやかな集いでありましたが…、(詩人の孫にあたる) 若いゲーテ (Goethe) も招待されておりました。彼はひと月前からふたたび当地に滞在しており、私たちすべてに気に



入られております。

また、8日ほど前には、若きミヒャエル フォン セルビーン (Michael von Serbien) 侯爵が、或る夕べを私たちのもとでもたれました。その際には、侯爵の随員で傳育官の老ヴーク (Wuk) も一緒でしたが、ルートヴィヒは、君はカッセル出身の彼を覚えていることと思います。(ヤーコブは、彼のセルビア語の文法書を翻訳したことがある)。侯爵は、ウィーンから書簡を送って訪ねたい旨通知され、実際、立ち寄られたわけです。そこで私たちが侯爵のためにパーティーを催さざるをえませんでした。おそらく、このようにして冬の期間は過ぎていくのでしょう。夏になれば、多少は平穏な時間がもてると思われます。私は、しばしばぎりぎりの時間まで仕事しております。それから私は、あたかも時間があふっていて、それを両手で窓から投げ捨てるかのように振る舞わなければなりません。私は、一晚あるいは数日の夕べを自宅で静かに過ごすことができるときはいつもうれしく思います」。

1846年の夏、ヴィルヘルムは弟のルートヴィヒに宛てて、歴史家ランケ (Ranke) の家での洗礼式について記している。「ランケのところで行われた祝宴は、これまでとは異なってはるかに荘重なものでした。しばしばひとりでランケに会う機会をもっていたバイエルンの皇太子が彼に、彼の新生児の洗礼立会人の代役を務めたい、と述べたことがありました。そこで、荘厳な祝宴が準備され、ベルリン中の著名人たちがそのために駆り出されたのでした。私たちは、晩の7時に出かけました。階段は下から上まで木の枝々や草花で飾り立てられていました。上のほうの広間には、大臣 (サヴィニー、アイヒホルン)、高官、公使、伯爵、アカデミーや大学の学者たちがいました。やや遅れて、皇太子がやって来ました。それから、わきのドアが開くと、その部屋は窓が覆われて礼拝堂に改装されていました。シャンデリアやろうそくが点灯され、祭壇が築かれていて、その背後には聖職者が礼装して立っておりました。私には現時点においても、宗教的分裂に接して不思議な気がしております。つまり、カトリックの皇太子が福音主義の聖職者に向き合っていて、福音主義の子供の洗礼に立ち会っていたのです。ほかには、フォス (Voß) 伯爵夫人 (亡くなった選帝侯夫人の友人)、シェリング、それにヤーコブが立会人となっておりました」。

ヤーコブの言葉は、彼が自宅や友人宅での誕生日のさいや、洗礼後の会食のさいに乾杯の辞を述べるときに、もっとも美しく感動的に響いた。ヘルマン・グリムが記している。ヤーコブのスピーチは、いつも何か予期しないものが含まれており、それには誠実さを感じさせる抑揚を帯びていた。が、彼の表現は、ときには珍妙な印象を与えないわけではなかった。例えば、受洗者が増えることになるので洗礼式のほうがずっと大事である、と論を展開するやり方で、ヤーコブは、洗礼式を結婚式と比較するのであった。

似たようなヤーコブの流儀を、ヴィルヘルム・グリムは、1847年1月2日に記している。それは、著名な彫刻家ラオホ (Rauch) の70歳の誕生日を祝した盛大なパーティーや枢密顧問官ボイス (Beuth) のところでの華やかなディナーの席上でのことであった。ちなみに今日、ボイスのブロンズの立像が、旧建築専門学校の前に立っている。

大臣サヴィニーのところに招待された件について、ヴィルヘルム・グリムが弟のルートヴィッヒに伝えている。「サヴィニーのところは、今、きわめて雅やかになっております。階段はガス灯で照らしだされ、木々や草花で覆われています。玄関の間に足を踏み入れると、すぐさま守衛によって呼び鈴が鳴らされます。次いで控えの間に、銀色に青の入った制服を着たふたりの使用人が現れ、訪問客のコートを受け取ります。それから、彼らは、さっとドアを開け、よく暖められており、こうこうと明かりのついたふたつの部屋を通して、応接室に案内します。しかし、そこも大きな四角形の部屋で、金色に青空色の色彩で塗られ、絵画が壁一面に掛けられています。そこにはサヴィニー夫人が長椅子に座っており、その背後には円い大きなテーブルがあります。夫人は立ち上がることなく、来客を待ち受けます。しかし、訪問客は愛想よく歩み寄ってゆき、夫人に挨拶の手を差しのべます。まず、9時ちょっと前になって客は訪れるが、さらに9時半頃に訪問することもあります。そのときにお茶がふるまわれます。10時15分に、来訪者の人数に応じて多少の差はあれともかく、さまざまな見事な料理が使用人たちによって運ばれ、提供されます。テーブルクロスは掛けられていません。が、それは洗練された生活様式に反します。マホガニー材で作られたテーブルの上に皿が置かれます。使用人たちは、白い手袋をはめて細々と給仕をしなければならず、ワインを注がなければなりません。

生き生きとした活発な語らいが飛び交い、サヴィニー夫人は、機知に富んだ冗談を次々に発します。しばしば実に多くの人々がサヴィニー宅におります。外国人としては、とくにイギリス人、フランス人、アメリカ人などがここに集います。11時半頃にサヴィニー夫人が立ち上がるので、それでお開きとなります。彼らは、たいいていの場合、客人を最初のドアのところまでお供します。彼らはたいへん親切で魅力的な方々です。その他の点では、また遠慮なくあけっぴろげに振舞うことができ、誰に対してであれ立ち上がったたり座ったりしております。また、辞去しようと思ったときには何時でも、別れの挨拶を述べることなく、席を外しております。ひとは毎晩訪ねることができ、ときには、特別に招待されたりもしております。

数日前に、実に面白い出来事がありました。その二三日前に私たちは招待をうけていました。したがってそれは、かなり大きなパーティーでした。ドルトヒェンも一緒に参加しました。私たちが9時に到着したとき、あらゆるものが見事にこうこうと照らされておりました。ヴュルテンベルクのアウグスト公、伯爵、侯爵、大使たちも招待されておりました。しかし、国王がその当日に、リスト (Liszt) とルビニ (Rubini) を宮殿に招き、演奏を依頼し歌曲の夕べを催したので、社交界に集う人々はみな、その音楽会に呼ばれておりました。つまり、その晩は、私たちのほかは誰もサヴィニー宅に現れませんでした。私たちは、カワカマス、フリカッセ、トリュフパイ、オレンジのアイスといった素晴らしい料理を寂しく食べなければなりませんでした」。

サヴィニー夫人は、華やかに家がにぎわうことを重視していた。サヴィニーは、大臣としてそれにふさわしく振舞わなければならなかったので、そうした大臣としての責務は、学者としての彼の本来の領域から彼を遠ざける結果となった。しかし、そういうことは、ヤーコブ・グリムの意向に沿うものではなかった。ヤーコブは次のように記している。「サヴィニーは、ときおり私たちのところにやって来ます。が、彼の催す夕べの宴に行くことを、私は好みません。というのも、そこにはさまざまな人々が集まってくるからです。彼は、私たちに対して親切で情愛を込めて接してくれます。しかし、ときどき私は、彼の以前の質素で自由な生活が失われていることを寂しく思います。サヴィニーは話の初めに、上品で優雅な風刺や皮肉 (Ironie) を発しますが、それも長く続くとなると私には耐えられません。彼は、

きちんと或る事柄の本質へ向かって議論することを避けております」。ヤーコプは、ダールマンに宛てた手紙のなかで記している。「サヴィニーは、彼がひとりであるときはいつも親切な人物です。が、パーティーなどで夫人と一緒にいると、彼はまったく別人のようで、冷やかで、気高く、ひとを寄せつけません……。ここでは卓越したひとかどの人物も、あそこでは、仲間内ではない単に例外的なひととみなされてしまいます。あそこでは、通常、公子や伯爵、大使たちだけが見受けられ、サヴィニー宅で夜毎に催されるサロンに集います。あそこでは、そこに集うひとびとは、実にくだらないことだけを上品で優雅な語り口で歓談しております。そういったつまらない話は、サヴィニーがそうであるように、或るひとりの男を必然的に退屈させてしまいます」。